

西海捕鯨業地域における益富又左衛門組の拡大過程

Expansion Process of the Masutomi Matazaemon Whaling Group
in the Saikai Whaling Industry Area

末田 智樹

SUETA Tomoki

要 旨

本稿では、近世中後期の西海捕鯨業地域における平戸藩生月島の益富組の経営展開について分析することが目的である。具体的な分析内容と結論の概略は以下の通りである。

筆者は、益富組が本格的に文政・天保期（1818～1843）以降、平戸藩領域よりも春鯨を多く捕獲することが可能であった大村・五島両藩の捕鯨漁場へ幕末期まで藩際経営を展開した点について明らかにした。その後、筆者は、神奈川大学日本常民文化研究所に所蔵されている『漁業制度資料 筆写稿本』所収の益富治保家文書に含まれる重要な資料を翻刻する機会を得ることができた。そのなかで、益富組が他領国における藩際捕鯨業へ転じる以前の宝暦・安永期（1751～1780）に平戸藩領域の有数な捕鯨漁場を掌握する過程を解明した。

今回も筆写稿本所収の益富家文書を翻刻および活用し、益富組が平戸藩領域を越えて他領国の捕鯨漁場において藩際経営の展開を開始した時期はいつ頃であり、生月島より南に位置する大村・五島両藩の捕鯨漁場以外に出漁した領国はなかったか、という点について解明することを目的とする。第1に、天明8（1788）年の的山大島の冬浦と翌寛政元（1789）年の平戸島津吉の春浦における益富組の運上銀史料を翻刻し、天明・寛政期（1781～1800）の平戸藩領域における益富組の経営展開について分析した。第2に、文化期（1804～1817）前半の益富組による対馬藩の廻浦への出漁に関する史料を翻刻し、対馬藩における益富組の藩際経営について分析を行い、次のことを明らかにすることができた。

益富組は、天明期までに平戸藩領域の有数な冬・春両浦の捕鯨漁場を、平戸藩壱岐の土肥組とともに多額の運上を支払うかわりに獲得した。しかし、それらの捕鯨漁場の地域性から春浦では冬浦に比べて不漁となることが多々あった。そのために益富組は、寛政期後半から文化期にかけて捕鯨漁場を大村・五島両藩の春浦のみならず、対馬藩の春浦へも拡大した。これは、益富組が近世後期の西海捕鯨業地域における最大の巨大鯨組に成長し、独自の西海捕鯨業地域を形成することに繋がることであった。

【キーワード】 西海捕鯨業地域、益富又左衛門組、捕鯨漁場、巨大組織、藩際経営

1. はじめに

近世日本における捕鯨業は紀州、土佐、長州、西海、房州の5つの地域で展開された。各地域において鯨を捕獲する専門集団は鯨組と呼ばれた。その鯨組が、近世初頭から藩領国を越えて活発化した地域は平戸・大村・五島・唐津・対馬の諸藩の島々を捕鯨漁場とした西海であった。その背景には、平戸オランダ貿易で活躍した初期特権商人を中心とした平戸町人の存在があった。彼らは、紀州の鯨組が西海へ出漁したことで捕鯨技術などの伝播を受け、貿易であげた利益を元手に鯨組を創業した。それにより西海に中小諸藩で構成された広範囲な捕鯨業地域が成立した⁽¹⁾。

筆者は、西海捕鯨業地域における藩領国を越えた鯨組の展開について、平戸藩生月島の益富又左衛門組を事例に第一次史料から分析を重ねてきた⁽²⁾。具体的には、益富組が平戸藩領域を越えて隣接する大村藩の江島や五島藩の黄島などの捕鯨漁場へ出漁した点に関して、解読した益富家文書を使用し図式化を試み論証した⁽³⁾。益富組は、平戸藩領域の捕鯨漁場に比べてより一層春鯨を捕獲するために、文政・天保期（1818～1843）以降幕末期まで生月島より南部に位置する大村・五島両藩の捕鯨漁場へ藩際経営を展開した⁽⁴⁾。この点については天保初期の作成とされる『勇魚取絵詞』に記されており、それを前著で第一次史料から裏づけた⁽⁵⁾。そのことで益富組による藩を越えた捕鯨業経営に関しては、西海捕鯨業地域の諸藩における鯨組の変遷とともに「藩際捕鯨業」および「藩際経営」として整理・位置づけすることができた⁽⁶⁾。

しかし、益富組が藩際経営を展開するなかで、時間的・空間的な側面で不明瞭な点を残していた。前者は、益富組がその展開をいつ頃から本格的に開始したのかということである。後者は、益富組が生月島より北部に位置する対馬藩や長州藩へ出漁したのかということである。

筆者は、前稿で神奈川大学日本常民文化研究所（独立行政法人水産総合研究センター中央水産研究所図書資料館）に所蔵されている『漁業制度資料 筆写稿本』（以下、筆写稿本）所収の（当時長崎県北松浦郡生月町）益富治保家文書（以下、益富家文書）に含まれる資料を翻刻した。そこで、益富組が他領国における藩際捕鯨業へ転じる以前の宝暦・安永期（1751～1780）に平戸藩領域の有数な捕鯨漁場を掌握する過程を解明した⁽⁷⁾。引き続き本稿では、筆写稿本所収の2点を益富家文書の原史料と照らし合わせて翻刻および活用し、時間的・空間的な2つの課題に迫ることで、益富組が巨大鯨組に成長しつつ近世後期に独自の西海捕鯨業地域を形成していた点を明らかにすることを目的とする。

2. 天明・寛政期の平戸藩領域における経営展開

益富組は、享保10（1725）年創業以来、元文・寛延期（1736～1750）までに本拠地の生月島御崎浦と壱岐の勝本・瀬戸浦（隔年交代）の2つの捕鯨漁場で鯨組を展開し、経営を安定させることに成功した⁽⁸⁾。宝暦・安永期では、御崎浦や壱岐に続いて平戸藩領域の有数な捕鯨漁場であった冬浦的山大島（以下、大島）と春浦の平戸島津吉浦を、平戸藩への多額の運上上納と引き替えとする浦請で獲得した。これにより益富組は、平戸藩壱岐を本拠地とした土肥組と並んで、同時に3つの鯨組を経営する平戸藩屈指の巨大鯨組に成長した⁽⁹⁾。

本章では、筆写稿本所収の天明8（1788）の大島冬浦と翌寛政元（1789）年の津吉春浦における益富組の運上銀史料を翻刻し⁽¹⁰⁾、それを通して天明・寛政期（1781～1800）の平戸藩領域における益富組の経営展開について考察する。

【史料 1】

(表紙)

寛政元

申冬方

大嶋組御運上銀指引帳

酉春迄

酉

五月 御勝手方

益富又左衛門殿

申冬方

大嶋組運上先納

酉春迄

益富又左衛門

一 銀三拾五貫目 魚運上先納

一 銀拾五貫目 米先納

ノ銀五拾貫目

一 銀三拾三貫九百六拾六匁

但大嶋組津吉春浦共ニ取揚候鯨数四拾五本之内、勢美本魚貳拾六本御運上銀貳拾六貫目、同壺本白子御運上銀壹貫目、同志もり壺本御運上銀八拾六匁、座頭本魚拾六本御運上銀六貫八百八拾目、同白子壺本御運上銀なし、右魚数ニ当ル御運上銀

一 銀五拾貳貫六百四拾目

但右同所冬春魚数四拾五本之内白子貳本志もり壺本御運上油なし、残四拾貳本ニ当ル御運上油九百四拾丁ニ当ル御運上銀壹丁五拾六匁替ニノ

合銀百三拾六貫六百六匁

㊦

内三拾五貫目 魚運上先納引

残百壹貫六百六匁 納り前

㊦

内拾五貫目 未十一月納り

但米先納銀直相納り

同八拾六貫六百六匁 常平所納り前

右者大嶋組津吉春浦共ニ去申冬方当酉春迄鯨運上銀並相定組方先納銀指引如斯御座候納り通ニ相成銀預り置申候追而指引相立可申候以上

酉

五月 武富喜蔵

亀淵与助

益富又左衛門殿

前書之通承届候以上

橋本勇 平㊦

日高治左衛門㊦

吉木形右衛門

都野川軍兵衛㊦

史料1から次の2点が即座に判明しよう。第1には、大島・津吉両浦における益富組の運上に
関して独立的に記述された史料であることがわかる。前稿で翻刻した史料は、安永期（1772～
1780）の瀬戸・御崎・大嶋の3組における運上納がまとめて記されたものであった。『益富家文
書目録』からは、天明7・8年の冬・春両浦までの壱岐両組（勝本もしくは瀬戸）・御崎・大嶋組の
運上史料がみえる⁽¹¹⁾。その次の年に該当するのが史料1であり、天明8年冬浦から壱岐両組・御
崎組と大嶋組・津吉組は分けて記録が残された。

安永期の史料と比べてみると、史料1では大嶋・津吉両組に魚運上先納銀と米先納銀が設定さ
れていたことがわかる。これ以前の両組の高い捕獲数から単独の3つ目の益富組として運上先納
銀が決められ定額納となった⁽¹²⁾。この平戸藩と鯨組との密接な貢納関係が、西海捕鯨業地域にお
いて巨大鯨組を出現させ、当時全国の長者番付の上位にその名があがるほどの地方豪商に発展でき
た大きな要因であったことは間違いない⁽¹³⁾。これについては、今後さらなる検討が必要であろう。

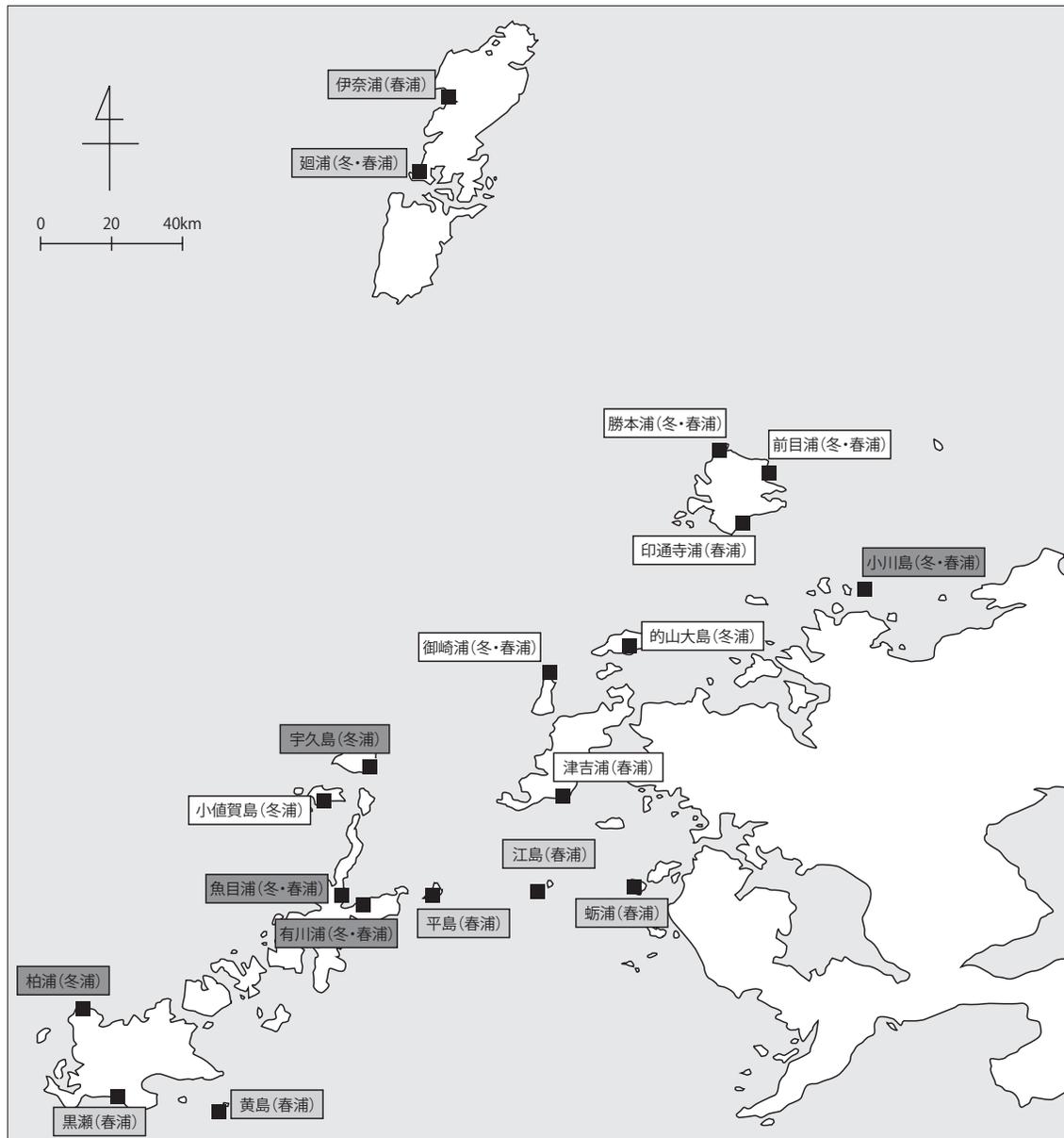
第2には、平戸藩から大島・津吉両浦で3番目に鯨組活動が認められた背景として、益富組に
よる両浦における捕獲数の増大があったことがわかる。益富組は、大島の冬組と津吉の春組を合わ
せて45頭捕獲しており、そのうち勢美鯨は26頭、座頭鯨は16頭であった。同年の壱岐冬浦の瀬
戸組では46頭（勢美鯨18頭、勢美鯨の見分物22頭、座頭鯨の見分物4頭、その他2頭）捕獲し、春
浦では9頭（勢美鯨3頭、勢美鯨の見分物5頭、座頭鯨の見分物1頭）の合計55頭であり、それ以前
も含めて壱州組の捕獲数に匹敵していた⁽¹⁴⁾。これにより、平戸藩領域の益富組は冬・春両浦とも
に3組となったことが、平戸藩への運上先納銀の定額納が定められた大きな理由であったと捉え
てよいだろう⁽¹⁵⁾。

平戸藩領域における益富組の経営展開は軌道に乗ったかのようにみえたが、拙著で示した通り寛
政4（1792）年までの運上銀史料からみると大嶋・津吉両組の捕獲数は下降していた⁽¹⁶⁾。すなわ
ち、明和・安永期（1764～1780）の壱岐春浦において益富組の捕獲数はすでに不振であり、寛政
初期まで同様の捕獲数であった⁽¹⁷⁾。寛政初期における平戸藩領域の春浦の全体的な不振が表面化
していたことは示した通りである⁽¹⁸⁾。春浦の捕獲数増加は、益富組にとって西海捕鯨業地域にお
ける巨大鯨組へと成長するうえで乗り越えなければならない最大の経営課題となっていた。

寛政・文化期（1789～1817）の鯨組の藩際経営について筆者は、唐津藩の中尾組を含め土肥組
と益富組について考察を加え、近世中後期における西海捕鯨業地域の3大鯨組と位置づけた⁽¹⁹⁾。
寛政11（1799）年に平戸藩領域において益富組は、大島の冬浦と壱岐の印通寺の春浦において展
開した。この時期までに平戸藩領域の有数な捕鯨漁場は、図1にあるように壱岐の勝本・瀬戸と
生月島御崎浦の冬・春両浦のほか、大島と小値賀島の冬浦、津吉と印通寺の春浦に集約されてい
た⁽²⁰⁾。益富組は、これらの捕鯨漁場を平戸藩の2大鯨組であった土肥組と交互に棲み分けていた⁽²¹⁾。
しかし、平戸藩領域とその周辺の捕鯨漁場の地域的特性は捕獲数からして冬浦であった⁽²²⁾。

益富組は、安永・天明・寛政期（1772～1800）において3つ目の鯨組経営が可能な捕鯨漁場と
して、冬浦は大島・小値賀島、春浦は津吉・印通寺で展開した。しかし、益富組は津吉組と壱岐両
組における春浦の漁獲高の不振を見逃せなくなっていた⁽²³⁾。そのため益富組は、寛政期の後半か
ら大村・五島両藩における春浦の捕鯨漁場を求めて本格的に出漁したのであった⁽²⁴⁾。春浦を求め
た益富組による藩際経営は、西海捕鯨業地域の南部に位置する大村・五島両藩だけではなかった。
益富組は、生月島より真逆の北部に位置する対馬藩の捕鯨漁場へも出漁していた。

図1 近世中後期西海における冬浦・春浦の捕鯨漁場



3. 文化期の対馬藩廻浦における藩際経営

西海捕鯨業地域の捕鯨漁場の特色については、前章で明らかになったように北部の平戸藩を中心とした冬浦と南部の大村・五島両藩を中心とした春浦であった⁽²⁵⁾。では、従来あまり論じられてこなかった対馬藩の捕鯨漁場はどのような地域性を有していたであろうか。筆者は、安永期と寛政期における対馬藩の捕鯨漁場の特色について示したことがあり、その多くは春浦であった⁽²⁶⁾。『鯨史稿』に「壱岐并ニ生月ハ冬ノ漁多ク対馬ハ春許リト聞ユ」と記され、文化期（1804～1817）においても春浦が中心であった⁽²⁷⁾。近世中期以降に対馬藩の捕鯨漁場は、大村・五島両藩と同じく春浦に集中していた。

文化期前半の益富組による対馬藩の廻浦への出漁に関する資料が、筆写稿本の益富家文書のなかに収録されている。『益富家文書目録』からでは対馬藩に関する史料はあまり見当たらないので、

筆写稿本を使用する意義は非常に大きい⁽²⁸⁾。本章では、まずそれを以下に翻刻する。

【史料2】

(表紙)

文化六年
対州廻組御墨附写シ
巳 益富組
六月

文化元甲子七月対州廻組浦請願濟丑春方未春迄七ヶ年請浦之内丑年方巳春迄春浦五ヶ年冬浦寅冬方辰冬迄三ヶ年願濟之御墨附左之通

覚

- 一 廻浦春鯨組境ハ 仁位郷領網嶋方佐須郷領阿里崎迄
- 一 御運上文字銀貳拾五枚
- 一 勢美鯨親
- 一 同子
- 一 児鯨親
- 一 座頭鯨親
- 一 長須鯨親

右突運上壺本ニ付

文字銀壺貫目宛

- 一 児鯨ノ子・座頭鯨ノ子・長須鯨ノ子突運上銀被差免候事
- 一 浦運上増之儀式拾本迄者文字銀貳拾五枚指出、甘本越越候ハ、倍增運上可指出事
- 一 組方飯米之儀者手寄方取寄を候様可致候、尤浜入ノ員数引合書附一と船改所江可差出事
- 一 組方之者共村方且漁場ニおゐて猥成義無之様頭取之者方可相示事

右者依願来ル乙丑年よ利辛未迄七ヶ年之間請浦被指免候間毎年運上銀可差出者也

文化元甲子年

対州
七月日 郡奉行

平戸領生月

益富又左衛門殿

浦主

中村屋
吉之助殿

覚

- 一 廻浦冬鯨組境ハ 仁位郷網嶋方佐須郷阿里崎迄
- 一 浦運上文字銀拾貳枚半
- 一 勢美鯨親子共ニ壺本ニ付

突運上文字銀壺貫目宛

但当丙寅年方戊辰年まで三ヶ年之間ハ勢美鯨親子共ニ壺本ニ付文字銀五百目宛可差出、
尤三ヶ年越候ハ、己巳年方ハ親子共ニ壺本ニ付文字銀壺貫目宛可差出事

- 一 座頭長須児鯨子持

壺最合ニ付突運上文字銀壺貫目宛

但右同断当丙寅年方戊辰年まで三ケ年之間ハ一最合ニ付文字銀五百目宛可差出、尤壺最合ニ付文字銀壺貫目宛可差出事

- 一 座頭・長須・兎鯨壺本物者突運上文字銀五百目宛
- 一 座頭・長須・兎鯨之連魚壺ト最合ニ付突運上文字銀壺貫目宛
- 一 座頭・長須・兎鯨之子計り取候節ハ春組之通運上銀差免候事
- 一 冬浦方春浦ニ組直候節

彼岸十日前春組ニ直候事

但彼岸ニ入候前日方日数十日立候様可相心得事

- 一 大漁之節浦運上増之儀式拾本迄ハ拾式枚半、式拾本を越候得者倍運上可差出事
- 一 組方飯米之儀手前方取寄候様可致事、尤浜入節ハ員数引合書付船改所江可差出事
- 一 組方之者於村方猥成儀無之様頭取之者より可相示事

右者依願当丙寅年方来壬申年迄七ケ年之間冬組請浦被差免候間毎年運上銀可差出者也

文化三年丙寅 対州
七月 郡奉行

益富又左衛門殿

浦主
扇屋佐兵衛殿

平戸領生月嶋益富

又左衛門名代

中上甚兵衛

右者去ル甲子年右又左衛門依願廻浦春組仕据七ケ年御免被仰付置、是迄漁事茂相応ニ有之、尤先般申付候品茂有之候ニ付、当年方同浦江冬組を茂仕据度七ケ年之間請浦御免之儀其組浦主扇屋佐兵衛方願書取次差出、其役所濟書共見届候依之左之通申付候

- 一 冬浦組初而之事故先為試三ケ年ノ間運上進物ノ内半減ニ被仰付被下候様願出、則其通申付候、尤当冬漁事之模様ニ依候ハ、運上進物共ニ追而申付方之品可有之此段相心得可置候事
- 一 三ケ年之間者勢美鯨親子突運上壺本ニ付文字銀五百目宛ニ申付候、尤三ケ年越候ハ、漁不漁ニ不拘親子共ニ壺本ニ付文字銀壺貫目宛之運上ニ申付事
- 一 浦運上文字銀拾式枚半ニ申付候事
- 一 座頭・長須・兎鯨子持壺最合ニ付同壺貫目宛之運上申付候事
但三ケ年試之間ハ同五百目宛之運上申付候事
- 一 座頭・長須・兎鯨本物ハ運上五百目宛ニ申付候事
- 一 座頭・長須・兎鯨之子計取候節ハ春組之通運上指免候事
- 一 冬浦方春浦江組直り候節ハ彼岸十日前ニ春組ニ直候事
- 一 大漁之節浦運上増之儀式拾本迄ハ拾式枚半、甘本越候ハ、倍增運上可差出事
- 一 鯨奉行江之馳走方春組之通可相心得事
- 一 浦請進物組揚進物ノ義ハ春組之半減ニ可遣出候、尤突初穂進物ハ春組之通可遣出事
- 一 組方飯米之儀手前方取寄候様可致候、尤浜入節ハ員数引合書船改所江可差出事
- 一 春組之節も申付候通組方之者於村方猥成義無之様頭取之者方嚴重ニ可相示事

右之通被申付諸事手数之通可被取計候以上

七月廿六日

御納戸藏支配

御勝手方支配

御郡方支配

御郡奉行所

御用人中

御勘定奉行所 可被得其意候

船改頭役中
佐役

この史料は、対馬藩の捕鯨漁場であった廻浦への文化2（1805）年から7年間における益富組の出漁に対する対馬藩からの「御墨附写」である。内容は、益富組の「浦請」に対する対馬藩への詳細な運上と廻浦における鯨組活動の規範についてである。大別して3つの部分から構成され、そのほとんどが運上について書かれている。前稿と同様に、運上が藩と鯨組との密接な関係性を示す重要な事項であったことを鮮明にする史料である。

第1は、文化2年から同8年までの7ヶ年にわたる春浦の願済の部分である。まず、廻浦における「組境」が記載されている。益富組による捕鯨活動が可能な漁場の位置関係から確認されている。対馬藩において漁業が盛んであったため、捕鯨漁場の利用問題は大きかった⁽²⁹⁾。次に浦請の運上が文字銀25枚から始まり、以下に勢美鯨、勢美鯨の子、兎鯨・座頭・長須鯨の親の順で文字銀壹貫目とある。勢美鯨以外の3種の子の運上は上納なしとし、「浦運上」は鯨数が20頭を越えたら倍増とした。ここでは「浦運上」と「突運上」として記され、前者は浦請の運上のことで、後者は鯨種別の1頭につき決められた運上のことであった⁽³⁰⁾。

益富組が廻浦における活動期間中の「飯米」を取り寄せることを明記している⁽³¹⁾。500人前後で構成された益富組では、現地において食糧米を調達することは不可能であったため自ら準備した⁽³²⁾。それに、藩領外の鯨組が冬・春両浦の合わせて長期で5ヶ月間ほど滞在するために、それらの者が村や漁場で乱れないように監督することを命じられている⁽³³⁾。対馬藩の郡奉行から益富又左衛門と現地浦主の中村屋吉之助へ文化元年7月に許可が出ており、これは益富組と中村屋とで鯨組を開くための重要で共同的な作業であったことを示している⁽³⁴⁾。

第2は、文化3年から同5年までの3ヶ年にわたる冬組の浦請の部分である。春組と同じく冬組の捕鯨漁場の位置が確認され、続いて浦運上が記されている。冬浦では、春組の文字銀25枚に対して文字銀12枚半として半額になっている。それから春浦の中村屋から冬浦の扇屋佐兵衛へ浦主が交代した様子がわかる。同地において浦主の変化がみられた益富組関係の史料は、従来の益富組研究のなかで初めての紹介となり、ここに対馬藩廻浦の漁村の実態が示されている⁽³⁵⁾。

第1の部分には「春鯨組」と、第2の部分には「冬鯨組」と記されていることで、両組の違いが鮮明にわかる史料である。突運上については春組よりも詳細に書かれ、総じて鯨1頭につき、いずれの鯨種も500目であったことがわかる。しかし、勢美鯨とその他の3種は明確に区別され、勢美鯨を重視していたかが読み取れる⁽³⁶⁾。本史料から鯨種や親子の違いにより運上の相違が判明した。これは西海捕鯨業地域における対馬藩と平戸・大村・五島藩のみならず、西海捕鯨業地域とそれ以外の紀州、土佐、長州、房州などの地域における捕鯨業との形態を比較するうえで指標を示す貴重な史料である⁽³⁷⁾。そして史料2には、『勇魚取絵詞』に記載されている冬浦から春浦へ鯨組が変化する実際の日程が書かれ、鯨の回遊の変化などを示す時期を示していたと思われる⁽³⁸⁾。

第3は、冬組の浦請に関する但書きの部分である。当初3ヶ年の予定であった冬組について、

益富組は扇屋を通じて7ヶ年の浦請の願出をしていた。その場合は浦請の条件の変更が生じていた。勢美鯨の運上が3ヶ年を越えると不漁であろうとも500目から倍額の1貫目となり、「浦請進物」と「組揚進物」は半減となり、「鯨奉行」への「馳走」と「突初穂進物」は春組と同様であることなどであった⁽³⁹⁾。

冬浦は「組初而之事故先為試三ヶ年」とされ、春組と冬組の浦請の運上額や当初の期間などを比較してみても、廻浦において春浦が重視されていたことは判明する⁽⁴⁰⁾。益富組による対馬藩廻浦への藩際捕鯨業の狙いは、平戸藩領域における春浦の捕獲高を補うことであった。しかしながら、冬浦で大漁の場合には運上の倍額が明記されていた点からみて、対馬藩の誘致を受けつつも、益富組は生月島から遠征する以上、冬・春両浦と続けて鯨組を展開する方が経営上のメリットが得られると判断したのであろう。益富組の目的は冬・春両浦での7ヶ年の浦請で、冬浦の捕獲高の少なさを考慮しても春浦の捕獲高増大を考えた藩際経営を対馬藩で展開することであった⁽⁴¹⁾。

4. おわりに

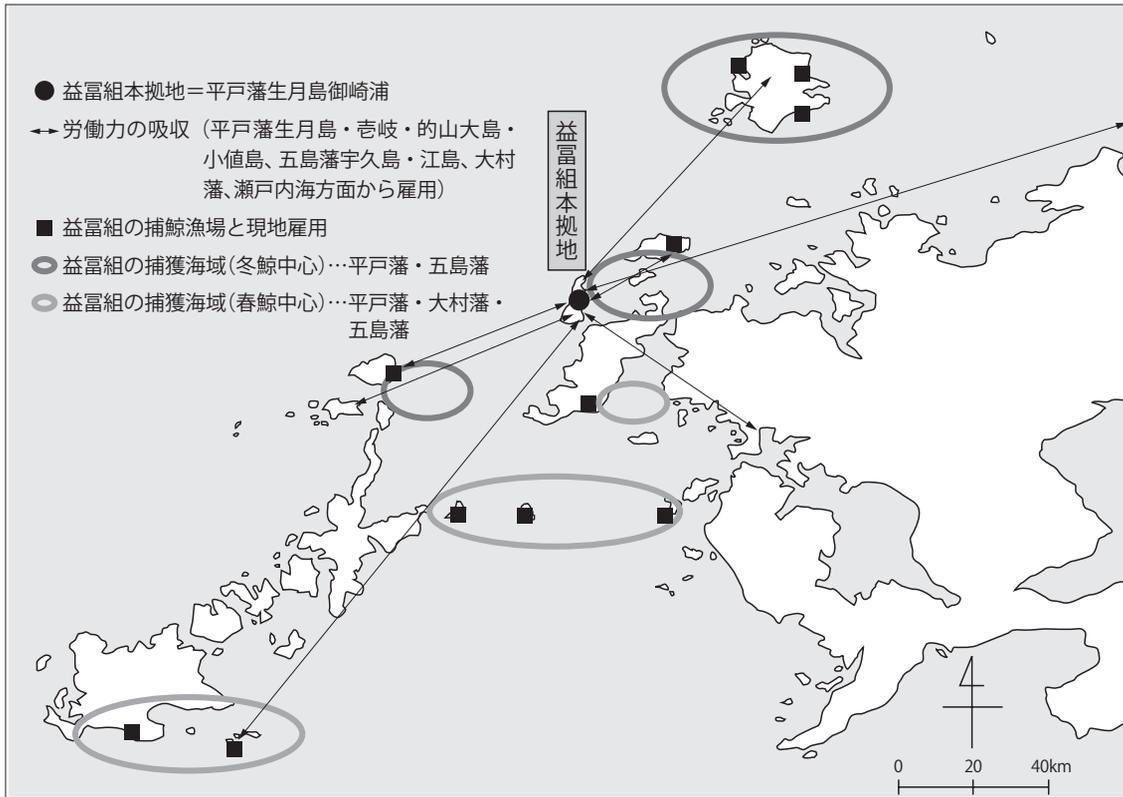
益富組が藩際捕鯨業に乗り出した過程とは、近世後期に益富組が独自の西海捕鯨業地域を形成した過程でもあった。最後に結論を5つに整理し、そこから導かれた課題として3つほどあげて、筆写稿本を活用した次稿の分析へ繋げたい。

第1。益富組は、天明期までに平戸藩領域の有数な冬・春両浦の捕鯨漁場を、平戸藩壱岐の土肥組とともに多額の運上を支払うかわりに獲得した。しかし、それらの捕鯨漁場の特性から冬浦に比べて春浦は不漁となるケースが増えたため、益富組では寛政期後半から大村・五島両藩へ本格的に出漁した。その背景には、近世中期西海捕鯨業地域の最大の鯨組であった大村藩松島を本拠地とした深澤組が寛政期初頭から急速に衰退したことがあった。寛政期の対馬藩へは本拠地の立地条件から壱岐の土肥組の出漁がみられたが、文化期頃から土肥組が衰退し、それにとまなう壱岐全体の漁獲高の不振があった。すなわち、深澤・土肥組という2つの巨大鯨組の経営動向を受け、益富組による春浦の捕獲数を補うための大村・五島両藩への南下策と対馬藩への北上策が可能となった。益富組は、壱岐の不振から平戸藩の捕鯨漁場よりも、北に位置する対馬藩の春浦へ進出した。これは、春鯨が内海を通る大村・五島両藩のルートと異なった対馬藩のルートを狙ったものであった⁽⁴²⁾。

第2。第1に関連して、益富組の北上策としては対馬藩よりさらに北に位置する長州藩北浦沿岸の捕鯨漁場への出漁がみられた。長州藩の捕鯨業に関わる史料から、寛政期前後に深澤組や中尾組が長州藩の捕鯨漁場へ出漁し、文化初期に益富組が出漁していたことが判明する⁽⁴³⁾。これは拙著でも示したが、西海捕鯨業地域の鯨組は長州藩の捕鯨事業との関連性が強く、西海捕鯨業地域を越えて日本海沿岸の広範囲な捕鯨業地域において鯨組の連鎖がみられた。長州捕鯨は西海の鯨組の影響を受けて成立し、その後の展開過程のなかで長州捕鯨では御手組の性格が色濃くなったが、何度も不漁の時もあった。その時に西海捕鯨業地域の巨大鯨組の藩際経営に依存していたのであろう⁽⁴⁴⁾。益富組の北上策には、対馬藩の延長線上として長州藩の捕鯨漁場への拡大が存在していた。

第3。益富組は捕鯨漁場のみならず地域性を活かし鯨組組織を拡大した。益富組と土肥組との違いは、益富組が本拠地生月島御崎浦の冬・春両浦で平均的に捕獲できたことであった⁽⁴⁵⁾。御崎浦では冬・春両浦を通じて安定的な捕獲数が確保できたのに対し、土肥組は壱岐を本拠地としていたために春浦が常に不安定であった。平戸藩の両組は、より捕獲数が望める春浦の捕鯨漁場を求めて展開した結果、益富組は大村・五島両藩の春浦が壱岐の土肥組より近距離であったために、一族の山縣家や別当屋の組織力を土台に積極的に出漁し、活路を開いた。

図2 西海捕鯨業地域における益富組の生産活動範囲



第4。これにより文化期から天保期にかけて最大の鯨組組織に成長した益富組は、独自の西海捕鯨業地域を図2に示す通り形成した。これは西海捕鯨業地域の中央部に位置する生月島御崎浦を中心とした「益富組捕鯨業地域」であり、そこに巨大鯨組の優位的な雇用範囲や捕鯨漁場の成立がみられた。延宝期(1673～1681)以降寛政初期までの春浦を中心とした深澤組による西海捕鯨業地域の形成を受けて、冬浦を中心とした平戸藩の鯨組が突組から網組の生産組織へ転換することで捕獲数を激増させ、巨大鯨組間の競争のなかで西海捕鯨業地域の確立を成し遂げたと捉えることができよう。冬浦の捕獲鯨の方が良質であったことなど販売・流通ルートを検討も含めて今後必要であるが、益富組は西海地方の3大漁業島国である平戸藩、五島藩、対馬藩のなかで、冬浦の捕鯨漁場を核とした平戸藩を中軸に、北部の対馬藩と南部の五島藩の春浦における捕鯨漁場を獲得した。益富組は、文化期初頭までに平戸藩を中心に北から対馬・大村・五島藩の捕鯨漁場を結ぶ益富組の捕獲展開地域を緻密に完成させたのであった。しかし、対馬藩への連続した出漁は文化期初頭のみであり、文政期以降の益富組は五島藩の春浦の捕鯨漁場をめがけて南下した。それに、五島藩へ向かう途中に位置した3つの春浦であった蛎浦、江島、平島を、大村藩の深澤組が消滅したのちに浦請で獲得し、西海捕鯨業地域のなかで最高の春浦からなる独自の捕獲海域を作りあげた⁽⁴⁶⁾。

第5。史料1からうかがえた平戸藩への運上の役割は多大であり、同様に史料2からも対馬藩への膨大な運上銀がみられ、他領国にとっても巨大鯨組の誘致は重要であった。平戸藩において冬浦の捕獲数で成長した益富組が寛政期後半より大村・五島・対馬藩へ出漁することで、さらに経営を発展させるとともに西海捕鯨業地域を成立させた。巨大鯨組を他領国が受け入れた最大の理由は運上であったが、そのほかに巨大鯨組による網取捕鯨業の技術と鯨組組織形態が幕末期にかけて大きな意味を持つことになる。寛政期に幕府の命で益富組による蝦夷地へ捕鯨開拓のために視察を行うことで益富組の知名度は増し⁽⁴⁷⁾、それが対馬藩や長州藩の捕鯨漁場への進出に繋がり、それら

の地域の捕鯨業の発展に貢献した。益富組は、天保期以降幕末期にかけて対馬藩の亀谷組をはじめとした中小鯨組を出現させるようになった捕鯨技術や鯨油の生産・販売組織を普及する伝播的役目を担った⁽⁴⁸⁾。この点も益富組が西海捕鯨業地域を形成させた点として評価でき含められよう。

上記の試論を展開するために、次に究明しなければならない課題としては以下の3つである。

第1。益富組が文化期以降に北上を止めた理由を探るために、対馬・長州両藩の捕鯨業形態との関係性について分析することである。これにより西海捕鯨業地域のみならず日本海沿岸捕鯨地域のなかで鯨組組織を比較することが可能となり、近世日本捕鯨業の時間的・空間的な両面からの実態解明が一段と可能となる⁽⁴⁹⁾。

第2。第1をより明確にするためには、西海・長州の日本海沿岸における鯨の回遊ルートと冬・春両浦との関係など学際的視点から深く考察する必要がある。さらに日本海沿岸のみならず、太平洋沿岸の紀州や土佐も含めて考察を進めることで、近世日本捕鯨業の全体像を捉えることが必要である。

第3。近世後期の益富組による文化期以降の藩際経営の展開過程と独自の西海捕鯨業地域の形成の問題について掘り下げるためには、寛政期における益富組の経営展開の分析が不可欠となる。合わせて、従来益富組に関して考察が不十分であった嘉永期以降の経営展開について検討も必要となろう。

これらの解明により、近世日本捕鯨業地域のなかで西海捕鯨業地域が最大に発展した要因かつ特殊性である巨大鯨組の藩際経営についての定義が可能となろう⁽⁵⁰⁾。

注

- (1) 引用・参考文献の末田智樹『藩際捕鯨業の展開』、川瀨龍「初期平戸町捕鯨組織家の人的考察」を参照。以下、とくに出版社と出版年を具体的に文献を示さないものは、引用・参考文献に掲げている。また頁数を示していない場合は文献全体に関係しているためである。他に、吉村雅美『近世日本の対外関係と地域意識』（清文堂、2012年）に優れた論考が含まれている。
- (2) 末田智樹『藩際捕鯨業の展開』。
- (3) 末田智樹『藩際捕鯨業の展開』86・89・92・106・109・113・120・125・183・253・268頁。
- (4) 末田智樹『藩際捕鯨業の展開』、末田智樹「近世日本における捕鯨漁場の地域的集中の形成過程」。
- (5) 「勇魚取絵詞」（宮本常一・原口虎雄・谷川健一編『日本庶民生活史料集成』第10巻、三一書房、1970年）、末田智樹『藩際捕鯨業の展開』、末田智樹「近世日本における捕鯨漁場の地域的集中の形成過程」。
- (6) 末田智樹『藩際捕鯨業の展開』、末田智樹「近世日本における捕鯨漁場の地域的集中の形成過程」。
- (7) 末田智樹「西海捕鯨業地域における巨大鯨組の形成過程」。
- (8) 末田智樹『藩際捕鯨業の展開』、末田智樹「西海捕鯨業地域における巨大鯨組の形成過程」。
- (9) 末田智樹「西海捕鯨業地域における巨大鯨組の形成過程」。
- (10) 「寛政元酉五月 申冬方酉春迄 大嶋組御運上銀指引帳 御勝手方 益富又左衛門殿」（秀村選三・藤本隆士他編『益富家文書年代順目録』4頁のNo.134）。
- (11) 秀村選三・藤本隆士他編『益富家文書年代順目録』3頁。
- (12) 松下志朗「西海捕鯨業における運上銀について」。
- (13) 松下志朗「西海捕鯨業における運上銀について」、末田智樹「近世日本捕鯨業における地方豪商的『鯨組』の成立・発展過程—紀州・土佐・長州・西海の4大地方の比較分析—」（社会経済史学会第80回全国大会報告要旨、2011年）。
- (14) 「寛政元酉五月 申冬方酉春迄 瀬戸御崎鯨組御運上銀指引帳 御勝手方 益富又左衛門殿」（秀村選三・藤本隆士他編『益富家文書年代順目録』4頁のNo.135）。
- (15) 松下志朗「西海捕鯨業における運上銀について」。
- (16) 末田智樹『藩際捕鯨業の展開』160～161頁。
- (17) 末田智樹『藩際捕鯨業の展開』147～148・159頁。
- (18) 末田智樹『藩際捕鯨業の展開』147～148頁、末田智樹「近世日本における捕鯨漁場の地域的集中の形成過程」70頁。
- (19) 末田智樹「近世日本における捕鯨漁場の地域的集中の形成過程」。

- (20) 末田智樹「近世日本における捕鯨漁場の地域的集中の形成過程」60頁、古賀康士「西海捕鯨業における中小鯨組の経営と組織」103頁。
- (21) 末田智樹「近世日本における捕鯨漁場の地域的集中の形成過程」、武野要子「壱岐捕鯨業の一研究」、秀村選三「近世西海捕鯨業における生月島益富組の創業」13～14頁。
- (22) 末田智樹「近世日本における捕鯨漁場の地域的集中の形成過程」。
- (23) 末田智樹『藩際捕鯨業の展開』、秀村選三「近世西海捕鯨業に関する史料(2)」、秀村選三「近世西海捕鯨業史料『前目定目写』」。
- (24) 末田智樹『藩際捕鯨業の展開』、秀村選三「近世西海捕鯨史料『五島黒瀬組定』」。
- (25) 末田智樹「近世日本における捕鯨漁場の地域的集中の形成過程」。
- (26) 末田智樹「近世日本における捕鯨漁場の地域的集中の形成過程」53頁。
- (27) 大矢真一(解説)・大槻清準『鯨史稿(江戸科学古典叢書2)』(恒和出版、1976年)325頁。
- (28) 「文化六年己六月 対州廻組御墨附写シ 益富組」(秀村選三・藤本隆士他編『益富家文書年代順目録』10頁のNo. 429)。
- (29) 宮本常一『対馬漁業史』、及川将基「鯨組組織と対馬鯨場をめぐる諸関係」。
- (30) 松下志朗「西海捕鯨業における運上銀について」、鳥巢京一「明治期北海道捕鯨業」。
- (31) 末田智樹『藩際捕鯨業の展開』、秀村選三「近世西海捕鯨業史料『前目定目写』」。
- (32) 末田智樹『藩際捕鯨業の展開』、秀村選三「近世西海捕鯨史料『五島黒瀬組定』」、古賀康士「西海捕鯨業における中小鯨組の経営と組織」。
- (33) 中園成生・安永浩『鯨取り絵物語』264～270頁。
- (34) 宮本常一『対馬漁業史』、及川将基「鯨組組織と対馬鯨場をめぐる諸関係」、末田智樹『藩際捕鯨業の展開』。
- (35) 松下志朗「西海捕鯨業における運上銀について」、宮本常一『対馬漁業史』、及川将基「鯨組組織と対馬鯨場をめぐる諸関係」。
- (36) 松下志朗「西海捕鯨業における運上銀について」、古賀康士「西海捕鯨業における鯨肉流通」。
- (37) 末田前掲「近世日本捕鯨業における地方豪商的『鯨組』の成立・発展過程」。
- (38) 前掲「勇魚取絵詞」285頁。
- (39) 宮本常一『対馬漁業史』、及川将基「鯨組組織と対馬鯨場をめぐる諸関係」。
- (40) 宮本常一『対馬漁業史』、及川将基「鯨組組織と対馬鯨場をめぐる諸関係」。
- (41) 末田智樹『藩際捕鯨業の展開』。
- (42) 田畑久夫「西海捕鯨業の変遷」、宮本常一『対馬漁業史』。
- (43) 徳見光三『長州捕鯨考』、多田穂波『見嶋と鯨』、多田穂波『明治期山口県捕鯨史の研究』、新宅勇『萩藩近世漁村の研究』。
- (44) 徳見光三『長州捕鯨考』、多田穂波『明治期山口県捕鯨史の研究』。
- (45) 末田智樹『藩際捕鯨業の展開』。
- (46) 末田智樹『藩際捕鯨業の展開』。
- (47) 服部一馬「幕末期蝦夷地における捕鯨業の企図について」、鳥巢京一「江戸後期蝦夷地における捕鯨開拓」。
- (48) 秀村選三「徳川期九州に於ける捕鯨業の労働関係(2)」、宮本常一『対馬漁業史』。
- (49) 益富組による対馬藩や長州藩への出漁は、その春浦での捕獲高増大を狙ったものであった。しかし対馬・長州両藩は日本海沿岸の地域漁業が盛んであった大藩であり、そのため五島・大村両藩に比べ浦方制度が厳しかったと推察できる。今後は、運上銀の違いなどを通じて益富組が展開を中止した理由や、鯨組の連鎖のなかで対馬・長州両藩における位置づけを行うことが課題であろう。対馬藩の捕鯨業については、及川将基「神奈川大学日本常民文化研究所調査」、荒野泰典編、『グローバリゼーションと反グローバリゼーションの相克』は必須の文献である。
- (50) それ以外に、壱岐は西海捕鯨業地域のなかで冬鯨捕獲の最大の漁場とされており、寛政期以降、土肥組の対馬藩春浦への進出など他の鯨組や平戸藩との関係の分析も進めることも必要である。末田智樹『藩際捕鯨業の展開』を参照。

附記

益富家文書および益富組を中心とした近世西海捕鯨業史に関する経済史・経営史研究については、恩師の藤本隆士先生(福岡大学名誉教授)よりご指導を賜った。近世日本捕鯨業史における歴史地理学・民俗学的観点からの分析の重要性との方法論については、恩師の田畑久夫先生(昭和女子大学大学院教授)よりご指導を賜った。最後になりましたが、近世・近代漁業史研究の出発点と言っても過言でない神奈川大学日本常民文化研究所所蔵『漁業制度資料 筆写稿本』の存在がなければ、筆者による益富組研究が短時間のうちに進展することはなかつ

た。その閲覧と活用方法については、伊藤康宏先生、田島佳也先生をはじめとするプロジェクト班・国際常民文化研究機構の諸先生および職員の皆様に多くのご指導を賜った。心からの深謝のほかなく、ご期待に添えるように今後の研究に繋げていく次第である。

参考文献

- 荒木文朗、2008年、「五嶋有川湾における網取り捕鯨の歴史」『立教大学日本学研究所年報』第7号
- 荒野泰典編、2008年、『グローバル化と反グローバル化の相克—捕鯨を手がかりとして—（平成16年～19年科学研究費補助金研究成果報告書）』
- 岩崎義則、2010年、「捕鯨業者井元弥七左衛門と平戸藩—井元家文書の伝来とその分析—」九州大学『史淵』第147輯
- 魚屋優子、2003年、「小値賀島の捕鯨—藤松～小田～大阪屋組の捕鯨活動」『長崎県地方史だより』第61号
- 遠藤正男、1936年、「幕末鯨漁業に於ける経営形態」九州大学『経済学研究』第6巻第3号
- 及川将基、2008年、「神奈川大学日本常民文化研究所調査—鯨研究のための対馬在地史料の予備的調査—」『立教大学日本学研究所年報』第7号
- 及川将基、2010年、「鯨組組織と対馬鯨場をめぐる諸関係」大阪市立大学大学院文学研究科・塚田孝編『近世身分社会の比較史』
- 大槻清準、1976年、『鯨史稿（江戸科学古典叢書2）』恒和出版
- 大村秀雄、1969年、『鯨を追って』岩波書店
- 小川三郎、1938年、「深澤儀太夫と捕鯨法」『長崎談叢』第23輯
- 小葉田淳、1950年、「西海捕鯨業について」京都大学『平戸学術調査報告』、後に小葉田淳『日本経済史の研究』思文閣出版、1978年に所収
- 片岡千賀之、2012年、「明治期における長崎県の捕鯨業—網取り式からノルウェー式へ—」『長崎大学水産学部研究報告』第93号
- 川淵龍、1994年、「初期平戸町捕鯨組織家の人的考察」平戸市教育委員会編『ビジョン策定調査報告書・歴史史料調査報告書』平戸市
- 神田歳成、2003年、「西海地域における『小川島捕鯨』—玄海に勇魚を追った男たち—」佐賀県立名護屋城博物館編『研究紀要』第9集
- 古賀康士、2010年、「西海捕鯨業における地域と金融—幕末期壱岐・鯨組小納屋の会計分析を中心に—」『九州大学総合研究博物館研究報告』第8号
- 古賀康士、2011年、「西海捕鯨業における鯨肉流通—幕末期壱岐小納屋の販売行動を中心に—」『九州大学総合研究博物館研究報告』第9号
- 古賀康士、2012年、「西海捕鯨業における中小鯨組の経営と組織—幕末期小値賀島大坂屋を中心に—」『九州大学総合研究博物館研究報告』第10号
- 近藤勲、2001年、『日本沿岸捕鯨の興亡』山洋社
- 近藤儀左エ門、1977年、『生月史稿—カクレキリシタンの島生月史—』芸文堂
- 柴田恵司・高山久明、1979年、「鯨船」『海事史研究』第33号
- 柴田恵司、1980年、「西海鯨鯢記」『海事史研究』第34号
- 柴田恵司、1995年、「肥前大村深澤鯨組」石井謙治編『日本海事史の諸問題 対外関係編』文献出版
- 柴田恵司、1996年、「九州鯨組を支えた備後鞆と田島の人々」『海事史研究』第53号
- 新宅勇、1979年、『萩藩近世漁村の研究』
- 末田智樹、1992年、「近世西海捕鯨業益富組の一研究—天保10・11年大村藩江島捕鯨業を中心として—」『福岡大学大学院論集』第24巻第2号
- 末田智樹、1993年、「近世後期西海捕鯨業の展開—平戸藩生月島益富組の生産組織を通じて—」『福岡大学大学院論集』第25巻第2号
- 末田智樹、1994年、「近世前・中期における西海捕鯨業の成立と発展—技術と資本—」『福岡大学大学院論集』第26巻第2号
- 末田智樹、2004年、『藩捕鯨業の展開—西海捕鯨と益富組—』御茶の水書房
- 末田智樹、2005年、「江戸時代に存在していた国際的な捕鯨業？」中部大学編『アリーナ』第2号
- 末田智樹、2008年、「近世西海捕鯨業史研究の現状と五島藩捕鯨業の地域性」『立教大学日本学研究所年報』第7号
- 末田智樹、2008年、『近世日本捕鯨業の歴史地理学的研究—西海捕鯨業地域の形成と益富組の藩際経営—』昭和女子大学2007年度博士論文

- 末田智樹、2009年、「近世日本における捕鯨漁場の地域的集中の形成過程—西海捕鯨業地域の特殊性の分析—」『岡山大学経済学会雑誌』第40巻第4号
- 末田智樹、2010年、「自著を語る 末田智樹『藩際捕鯨業の展開—西海捕鯨と益富組—』御茶の水書房、2004年4月」中部大学編『アリーナ』第8号
- 末田智樹、2012年、「西海捕鯨業地域における巨大鯨組の形成過程—益富又左衛門組の運上に関する史料紹介—」神奈川大学『国際常民文化研究機構年報』第3号
- 高田茂廣、1988年、「西海捕鯨遺文」『福岡市立歴史資料館研究報告』第12集
- 武野要子、1968年、「辺境相良藩と領外資本の関係—芋の専売化をめぐる—」『九州文化史研究所紀要』第13号
- 武野要子、1969年、「沓岐捕鯨業の一研究—益富組小納屋の分析—」『福岡大学創立35周年記念論文集 商学編』
- 武野要子、1979年、「前日勝本鯨組永続鑑」福岡大学『商学論叢』第24巻第1号
- 田島佳也、1995年、「小川嶋鯨鯢合戦・解題」『日本農書全集』第58巻、農山漁村文化協会
- 多田穂波、1968年、『見嶋と鯨 見島と鯨編纂会』
- 多田穂波、1978年、『明治期山口県捕鯨史の研究—網代式捕鯨とその他の鯨とり—』マツノ書店
- 立平進、1995年、『西海のくじら取り—西海捕鯨の歴史と鯨絵巻—』長崎県労働金庫
- 田畑久夫、1987年、「西海捕鯨業の変遷—沓岐島を事例として—」『民俗と歴史』第19号
- 徳見光三、1957年、『長州捕鯨考』関門民芸会、のち長門地方史料研究所、1971年
- 鳥巢京一、1993年、『西海捕鯨業史の研究』九州大学出版会
- 鳥巢京一、1999年、『西海捕鯨の史的研究』九州大学出版会
- 鳥巢京一、1999年、「江戸後期蝦夷地における捕鯨開拓」福岡大学『商学論叢』第43巻第3号
- 鳥巢京一、2006年、「明治期北海道捕鯨業」『福岡市総合図書館研究紀要』第7号
- 中倉光慶、1983年、「西海捕鯨と井元弥七左衛門家について—北松浦郡大島村—」『松浦党研究』第6号
- 中園成生、1999年、「平戸瀬戸の銃殺捕鯨」『民具マンスリー』第32巻第4号
- 中園成生、2001年、『くじら取りの系譜—概説日本捕鯨史—』長崎新聞社
- 中園成生、2003年、「紋九郎鯨伝説考」平戸市生月島町博物館『島の館だより』第7巻
- 中園成生、2006年、『改訂版くじら取りの系譜—概説日本捕鯨史—』長崎新聞社
- 中園成生、2007年、「西海漁場における網掛突取法捕鯨法の開始」平戸市生月島町博物館『島の館だより』第11巻
- 中園成生、2008年、「大島捕鯨の概要」平戸市生月島町博物館『島の館だより』第12巻
- 中園成生、2009年、「西海捕鯨漁場における熊野漁民の活動」『熊野誌』第56号
- 中園成生・安永浩、2009年、『鯨取り絵物語』弦書房
- 西村次彦、1967年、『五島魚目郷土史』西村次彦遺稿編纂会
- 服部一馬、1953年、「幕末期蝦夷地における捕鯨業の企図について」『横浜大学論叢』第5巻第2号
- 秀村選三、1952年、「徳川期九州に於ける捕鯨業の労働関係（1）」九州大学『経済学研究』第18巻第1号
- 秀村選三、1952年、「徳川期九州に於ける捕鯨業の労働関係（2）」九州大学『経済学研究』第18巻第2号
- 秀村選三・藤本隆士、1976年、「西海捕鯨業」『江戸時代図誌 西海道1』第22巻、筑摩書房
- 秀村選三、1980年、「近世後期肥前小川島捕鯨業の一断面—草場佩川の見たる—」九州大学『経済学研究』第46巻第1・2合併号
- 秀村選三、1996年、「近世西海捕鯨業に関する史料（1）—肥前国生月島益富家『所々組方永代記』—」久留米大学『産業経済研究』第36巻第4号
- 秀村選三、1996年、「近世西海捕鯨業に関する史料（2）—肥前国生月島益富家『二番永代記』—」久留米大学『産業経済研究』第37巻第1号
- 秀村選三、1996年、「近世西海捕鯨業に関する史料（3）—肥前国生月島益富家『二番永代記』—」久留米大学『産業経済研究』第37巻第2号
- 秀村選三、1996年、「近世西海捕鯨史料『五島黒瀬組定』—肥前国生月島益富組文書より—」久留米大学『比較文化研究』第18輯
- 秀村選三、1997年、「近世西海捕鯨業における生月島益富組の創業」久留米大学『比較文化研究』第19輯
- 秀村選三、1997年、「近世西海捕鯨業史料『前日定目写』—肥前国生月島益富組文書より—」久留米大学『産業経済研究』第38巻第1号
- 秀村選三、1997年、「幕末西海捕鯨業における益富組の労働組織の一史料」久留米大学『産業経済研究』第38巻第3号
- 秀村選三、2007年、「近世西海捕鯨業における鯨組の諸断面—益富組・中尾組について—」『九州文化史研究所紀要』第50号
- 日野浩二、2005年、『鯨と生きる—長崎のクジラ商日野浩二の生涯—』長崎文献社
- 日野義彦、1978年、「対馬における近代捕鯨について」『西南地域史研究』第2輯、文献出版

- 福本和夫、1978年、『日本捕鯨史話—鯨組マニファクチュアの史的考察を中心に—（新装版）』法政大学出版局
- 藤本隆士、1964年、「幕末西海捕鯨業の資金構成—生月島益富家の場合—」『福岡大学創立30周年記念論文集 商学編』
- 藤本隆士、1967年、「西海捕鯨業経営と福岡藩—地方市場の一考察—」宮本又次編『商品流通の史的研究』ミネルヴァ書房
- 藤本隆士、1967年、「鯨油の流通と地方市場の形成」『九州文化史研究所紀要』第12号
- 藤本隆士、1972年、「近世西南地域における銀錢勘定」福岡大学『商学論叢』第17巻第1号
- 藤本隆士、1975年、「近世西海捕鯨業経営と同族団（1）」福岡大学『商学論叢』第19巻第4号
- 藤本隆士、1975年、「近世西海捕鯨業経営と同族団（2）」福岡大学『商学論叢』第20巻第1号
- 藤本隆士、1976年、「益富又左衛門」『豪商百人（別冊太陽）』平凡社
- 藤本隆士、1978年、「近世西海捕鯨業史の研究—平戸藩生月島益富組を中心として—」九州大学『経済学研究』第44巻第2・3号
- 藤本隆士、1979年、「捕鯨図誌『勇魚取絵詞』考」福岡大学『商学論叢』第24巻第2・3号
- 藤本隆士、1981年、「西海捕鯨と鯨油の流通」『日本農書全集』第31巻月報
- 藤本隆士、1983年、「福岡藩と藩際経済—博多相物問屋をめぐって—」『福岡県史 近世研究編 福岡藩（2）』福岡県
- 藤本隆士、1991年、「徳川期における小額貨幣—銭貨と藩札を中心に—」『社会経済史学』第57巻第2号
- 藤本隆士編、1984年、「有川鯨組式法定（1）」福岡大学『商学論叢』第28巻第4号
- 藤本隆士編、1984年、「有川鯨組式法定（2）」福岡大学『商学論叢』第29巻第1号
- 藤本隆士編、1994年、『近世西海捕鯨業史料—山縣家文書—』福岡大学総合研究所
- 牧川鷹之祐、1968年、「西海地方の鯨供養」『科学技術史研究』第2号
- 牧川鷹之祐、1968年、「西海捕鯨考」『筑紫女学園短期大学紀要』第3号
- 牧川鷹之祐、1969年、「『鯨組一件』の研究」『筑紫女学園短期大学紀要』第4号
- 松下志朗、1969年、「西海捕鯨業における運上銀について—平戸藩領生月島益富組を中心として—」『福岡大学創立35周年記念論文集 人文編』
- 宮本常一、1972年、『中世社会の残存（宮本常一著作集第11巻）』未来社
- 宮本常一、1975年、『海の民（宮本常一著作集第20巻）』未来社
- 宮本常一、1983年、『対馬漁業史（宮本常一著作集第28巻）』未来社
- 森弘子・宮崎克則、2010年、「天保3年『勇魚取絵詞』版行の背景」『九州大学総合研究博物館研究報告』第8号
- 森弘子・宮崎克則、2012年、「大槻清準『鯨史稿』と大槻玄沢『鯨漁叢話』の関係性」『九州大学総合研究博物館研究報告』第10号
- 森弘子・宮崎克則、2012年、「西海捕鯨絵巻の特徴—紀州地方の捕鯨絵巻との比較から—」西南学院大学『国際文化論集』第26巻第2号
- 森田勝昭、1994年、『鯨と捕鯨の文化史』名古屋大学出版会
- 安永浩、2003年、「東松浦地域における古式捕鯨の操業について」佐賀県立名護屋城博物館編『研究紀要』第9集
- 安永浩、2005年、「明治期の呼子・小川島捕鯨一日誌にみる小川島捕鯨会社の操業実態—」佐賀県立名護屋城博物館編『研究紀要』第11集
- 安永浩、2005年、「明治期の呼子・小川島捕鯨—史料翻刻 小川島捕鯨会社日誌史料—」佐賀県立名護屋城博物館編『研究紀要』第12集
- 安永浩、2006年、「明治期の呼子・小川島捕鯨（2）—帳簿にみる小川島捕鯨会社からの鯨肉流通の一側面—」佐賀県立名護屋城博物館編『研究紀要』第12集
- 安永浩、2006年、「明治期の呼子・小川島捕鯨（2）—史料翻刻 小川島捕鯨会社帳簿史料—」佐賀県立名護屋城博物館編『研究紀要』第12集
- 安永浩、2007年、「『銃殺捕鯨日誌』について—明治期における銃殺捕鯨組の活動—」佐賀県立名護屋城博物館編『研究紀要』第13集
- 安永浩、2007年、「捕鯨近代化の諸相—呼子・小川島を中心に—」『立教大学日本学研究所年報』第6号
- 安永浩、2009年、「西海の網組時代に活躍した熊野出身者の末裔—18世紀後半の五島を舞台として—」『熊野誌』第56号
- 山口麻太郎、1959年、「初期日本捕鯨の諸問題」『社会経済史学』第25巻第5号
- 山口麻太郎、1980年、「西海捕鯨—網捕法の創始について—」『西日本文化』第166号
- 指方邦彦、1992年、「西海捕鯨と深沢組など鯨組の盛衰について」『大村史談』第40号
- *参考文献としては近世・近代西海捕鯨業史に関する研究を中心に掲げ、史資料、自治体史、図録類などは省いた。